

気動車の魅力

56-MA Y・H

初めに

東海道線や山手線のように架空電車線（以下架線とします。）と呼ばれる電線から電気を集電して走るような列車を電車、架線集電をしないでディーゼルエンジンの動力で走る列車をディーゼルカーや気動車、気車等と呼びます。

車両の名前の付き方

気動車の名前にキハやキロ等といった呼び名があります。キハの「キ」は気動車という意味で、「ハ」や「ロ」はイロハに因んだ車両のランクです。（食堂車の「シ」等の例外もあります。）

気動車の種類について

日本で最も車両数が多いのが「キハ」です。「キハ」は最初にキハ10系列が開発されました。キハ10系列は、一般形気動車として、蒸気機関車で運用されていた路線を気動車で置き換えるために製造されました。そして昭和後期に老朽化したキハ10系列を置き換えるためにキハ40系列が開発されました。

また、急行形気動車としてはキハ56やキハ66等の車両が開発されました。

さらにここ最近では、キハ10系列を置き換えたキハ40系列の老朽化も進んでそれに変わる気動車や、ハイブリッドカーが開発され、それらの車両への置き換えが進んできています。

今回はキハ系列をいくつか紹介させていただければと思います。一昔前は食堂車付き気動車である「キシ」や気動車2等車である「キロ」等がありました。キロは最近はいわゆる「グリーン車」となって引き継がれています。気動車グリーン車は非電化区間の主な路線で走っています。

他には、昔は鉄道路線をつかって郵便や荷物を運んでいた時代がありました。この時代に活躍した気動車には、気動車荷物車の「キニ」や気動車郵便車の「キユ」、気動車郵便・荷物車の「キユニ」等といった車両達が活躍していました。また、事業用車として、検測車両の「キヤ」等があります。他にもいくつかあるのですが、すべては紹介は出来ません。

次のページから主な車両の紹介にはいります。（「主な車両」の基準は筆者の独断により決めさせていただきます。）

キハ 120 形気動車



この車両はキハ 120 形車両です。主な活躍線区は JR 西日本の大糸線や姫新線、美祢線等といった路線で活躍しています。この車両が走っているところの多くが大赤字路線です。なので、一部の鉄道ファンから赤字の象徴などとも言われています。この車両のほとんどが押しボタン式のドアですが、まだ、いくつか手で開けるタイプのドアもあります。基本的には普通列車のみの運用ですが、路線によっては 1 日に数回ほど快速列車の運用に就くことがあります。写真の列車は、佐用駅 20:39 始発快速津山行きに乗ったときの写真です。プチ情報：写真の列車の終点津山駅の近くには、津山学びの鉄道館という旧国鉄時代に山陰・山陽地方で活躍していた列車や機関車が保存してあり、鉄道ファンのみならず、昔ながらの車両があるため、歴史が好きな人なども楽しめる内容になっています。

キハ 40 系気動車



この列車は過去に生産された気動の中では車両数が多い部類に入ります。前に紹介したキハ 120 形車両は JR 化後に JR 西日本が独自に開発した車両なので、JR 西日本圏内のみの活躍でしたが、この列車は国鉄時代の製造なので、北海道から鹿児島まで多くの車両がいました。しかし、現在最新型の H100 形ハイブリッド車両や、GV-E400 ハイブリッド車両など新型車両に置き換えられてしまっています。快速や区間快速などの運用にも良く就きます。

キハ 110 形気動車



キハ 110 形気動車です。この列車は JR 化後に JR 東日本が製作した車両なので、JR 東日本管内でしか乗れない車両です。主な活躍線区は八高線や水郡線などで活躍しています。この列車は急行や快速などの運用に就くことが多いです。また、活躍線区の 1 つである小海線ではハイブリッド気動車のキハ E200 や、キハ 110 を改造した観光列車「HIGH RAIL1375」が走っていることで知られています。

まとめ

今回は、主な気動車についてまとめました。簡単な説明になってしまいましたが、興味のある方や、これを読んで興味を持ってくださった方で、気動車についてもっと知りたいという方は、「気動車 国鉄」や「気動車 観光列車」等を検索エンジンで検索していただくと、気動車を改造して作った観光列車や、旧国鉄時代に製造された気動車の説明や写真が出てくると思います。是非調べて見てください。ここまでお読みいただきありがとうございました。